400th 浜田開府 1619-2019

時代を超えて 明日につなぐ

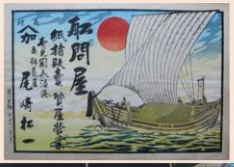
400年に想う未来－新たな浜田の物語

たたら製鉄と港・浜田

～古文書から読み解く地域経済～

2010年3月に実施した「たたら製鉄」再現の写真

浜田の港(長浜・瀬戸ケ島・浜田浦・松原浦・外ノ浦)



尾崎太郎氏所蔵

たたら製鉄と港・浜田　～古文書から読み解く地域経済～

Ⅰ　たたら製鉄の歴史

古来より脈々と受け継がれてきた「たたら製鉄」は、平安末期には長田別府(浜田市金城町長田)の主税として「黒金」が年貢注文されていた。下って、源平合戦、南北朝時代の「波佐谷の合戦」、戦国時代の毛利・尼子・吉川の戦乱をとおしても、たたら鉄を巡って、幾多の攻防の戦火をくぐってきた地域である。

毛利元就の領地時代那賀郡の鉄山地域が後の津和野藩の飛び地となった。

永禄13年(1570)尼子倫久が毛利氏の家臣山内元通の娘を妻に娶り、上来原・多雄へ移住。

慶長元年(1596)尼子元知は、石見銀山御番所支配人として、久佐にて、鉄山方取締将官として、毛利元就の命を受けて着任している。

前列左から、倫通室の墓、倫通の墓、倫久の墓、倫久室の墓。後列左から宗嗣の墓、宗久の墓

※室町時代・吉川家の御料所・波佐は、銀 70 貫であった。

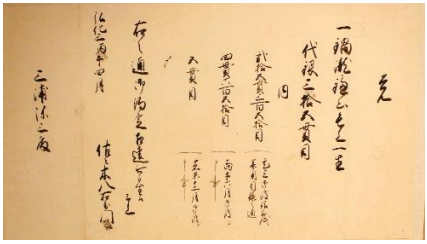
江戸時代になって、たたら製鉄は、民営で操業されるようになった。地域産業の要として、たたら製鉄の発展があった。地域農民も、馬を飼育して、駄賃稼ぎで、副収入を得て、村民は、豊かな生活を送ることができた。紺屋一つを例にとっても、村が豊かでないと藍染経営もなりたたないのである。

江戸時代後期の石見地方におけるたたら製鉄の盛衰を「鍋滝鈩」、「栃下鈩」、「桂迫鈩」の 3 つの鉄山の経営を通して、経営者であった三浦彦太郎・古和定助等の、当時の「たたら製鉄関連古文書」6,200 点によって理解することができる。

三浦彦太郎と古和定助は、波佐村の大水害と飢饉によって地域民の生活困窮を緩和させるために桂迫鈩を開設し地下農民の生活支援を行った。両者は、この鈩経営で資産を蓄え、古和氏は、住宅を新築し、多くの山林を手に入れた。

三浦氏は、加計の隅屋、佐々木八右衛門から鍋滝鈩の所有権を買い取る資金に充て、自ら鍋滝の泊小屋へ住まいを移し、鍋滝鉄穴、泊小屋の鍋滝鈩所、鍛冶屋を開設して、繁栄した。後に、三浦は、栃下鈩所も経営した。古和氏は、桂迫鈩所を引き続き経営した。

これらの「たたら文書」資料から判明したことは、広島県加計隅屋(佐々木八右衛門)、庄原(北広島町)の釘屋(香川喜三郎)が石見地方へたたら製鉄の経営で進出した経緯と、地元での、たたら製鉄産業の波及を知ることができる。



浜田市金城歴史民俗資料館「たたら製鉄」展示室の模様

鉧場の経営者が直接鉄穴場の経営を行っている小松木鉄穴、都川の政ケ谷鉄穴の例もある。鉄穴流しの行われた鉄穴場は、地主と契約を交わし、下流域の承諾を得た後に、砂鉄採集が行われていた。鉧所へ購入された石見地方各地の砂鉄は、三隅の諸谷、古和、折居、横山、神主、敬川、都川、小国など浜砂鉄なども含まれている。これらの砂鉄運送ルートも資料から知ることができる。諸谷や横山からは、門田中場を経由して、波佐中場に運ばれ、周辺の鉧所へ分配される。波佐中場から広島県の八幡中場へ中継され加計・隅屋の経営する山県郡内の各鉧所へ分配された。

小松木鉄穴(明治８年の記録)の抗掘範囲は 2,100 坪（6,930 ㎡） 7 反歩。90 日間　で 5,135 貫目(19ｔ256Ｋｇ)。830 人夫、代価 530 円 40 銭。掘出し、420 人、110 円 77 銭 8 厘、一日 6 人。精錬 410 人、519 円 49 銭、一日 20.5 人。鉱区税 1 円 5 銭。単価、掘出し＝26 銭 4 厘。精錬＝1 円 26 銭。

鉧所の開設に先立ち、風水によって鉧の方位、勘場の部屋割りを方位で表し、見立てていたことも今回の資料調査で解明された。

ほとんどの鉧所の吹小屋は角打であったが、桂迫鉧所は、丸打であったことが判った。勘場も「鉄蔵」、「帳場」、「くど」、「せついん」等も風水で吉凶を見立てていた。

長割鉄に仕上がった銑鉄は、仲買業者の手を経て北前船で、北は山形県酒田、南は熊本県高瀬まで流通された。最盛期は、天保、弘化、嘉永年間であ

った。栃下釈(慶應元年)の年間生産量は、銑 15,032 貫目(56t)。鉧 4,514 貫目(17t)。銑鉄の流通先は、栃下鍛冶場、芸州溝口鍛冶場、大暮鍛冶場、高野鍛冶場、川小田鍛冶場、雲耕鍛冶場へ広島への流通が主であった。

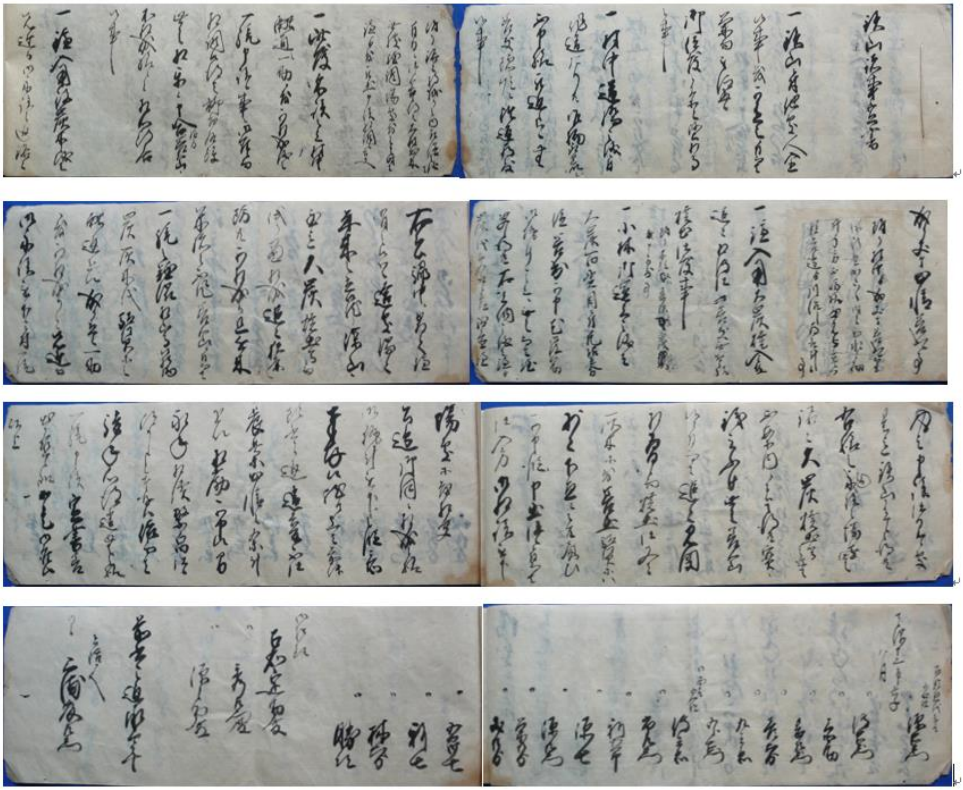
時代は下って、明治 8 年の「鉄山不景気ニ付儀定書」によると石見地方の釈所、鍛冶屋の数を知ることができる。

今回の企画展は、たたら文書 6,200 点によって鉄山の仕組み。砂鉄の流通経路。銑鉄の全国流通。鉄山の金屋子信仰。鉄山関係者の往復書簡で物・金・人の流れなどを中心にパネルを新調して、展示を行っています。

Ⅱ　鉄山開設と住民との取決め

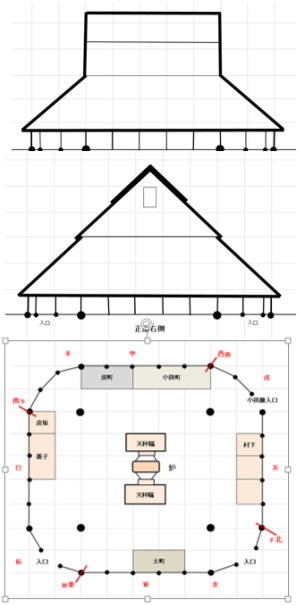
鉄山に付他所人会事、村中道橋の儀、鈩入用役炭、鈩入用大炭、炭灰木代などについて問題が発生した場合の対処法が宣書として経営者古和定助と百姓惣代源右衛門などと文書を交している。天保 12 年 8 月庄屋三浦藤兵衛が立会している文書である。

『鉄山諸事宣書』天保 12 年 8 月



Ⅲ　鈩所の縄張り(風水)

桂迫鈩は、宝求山という山名がついていた。古くからの鈩の適地で、古来桂の樹があって、桂迫という名前が付けられたものと伺える。天保 12 年に開設するに当たって、吹き小屋の天秤座の方位の決定は、風水の見立てによって、決定していたことが、たたら文書で明らかになった。勘場も風水見立てが行われていた。また、積雪地帯での鈩場は、丸打型の吹き小屋であったことも判明した。



桂迫鈩所の詳細データ

【吹小屋】丸打形式

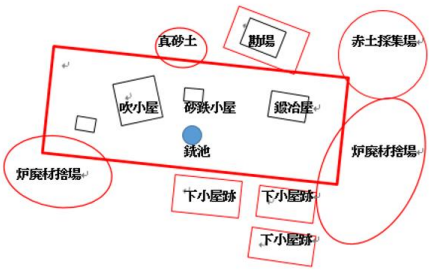
【風水導入】風水の見立てによる天秤座の決定。

【用材】本柱4本、外柱32本、桁4本、中桁2本、
登り桁16本、外桁16本、　貫34間、合掌8本。

【鈩天秤代】銀札200目(天保12年)

【小舟】天秤座から南南東線上に小舟を設置。

桂迫鈩所縄張り配置図



【桂迫鈩について】

桂迫鈩所は、天保 12 年 8 月から吹小屋など建設が始まり、翌 13 年より操業が開始された。経営者の吉和定助は、鈩経営について、①吉鈩(桂迫鈩)=天保 12 年～安政 3 年迄、佐竹屋(三浦彦太郎)と弐手(吉和定助)合事(共同事業)。②新鈩(桂迫鈩)=安政 3 年～安政 6 年迄、弐手と森三郎の合事(共同事業)。③鈩(桂迫鈩)=安政 6 年以降、慶応 3 年迄、弐手、一分稼ぎ(単独事業)之事。と経営状況を記録している。

鈩所の立地

①谷川の水利の叶うところ(銑池、砂鉄洗い場、土練り)
②小高い丘陵で廃土を捨てても河川、水田に公害の起こらない所(釜土、鉄糞)
③鈩所の裏山で真砂土・赤土が採集出来る所(釜土)
④馬の通行が可能な道が付けられる所(砂鉄、銑鉄の運搬)
⑤近隣に鈩所付山林がセット出来ること(鈩山)

Ⅳ　鈩場の記録・大福帳

鈩場の記録帳は、「金銀請払帳」、「小鉄請取帳」、「真砂請取帳」、「大炭請取帳」、「役木請取帳」、「鈩方算用帳」、「米請払帳」、「萬貸方覚帳」、「諸駄賃覚帳」、「番子算用帳」、「人別仕出帳」など数多くあるが、特に「鈩日帳」、「日別萬覚帳」などは毎日の作業記録を把握する上で貴重な文書である

『鑪日帳』(桂迫鈩所・古和家文書)

Ⅴ　真砂砂鉄の採集

たたら製鉄の経営で、重要なことは砂鉄の良否にかかっていた。良質で歩留まりの良い砂鉄を入手するかである。鈩の経営者は鉄穴流し場も併せて所有している事例が多い。三浦氏は、小松木鉄穴や都川の政ケ谷鉄穴も所有していた。

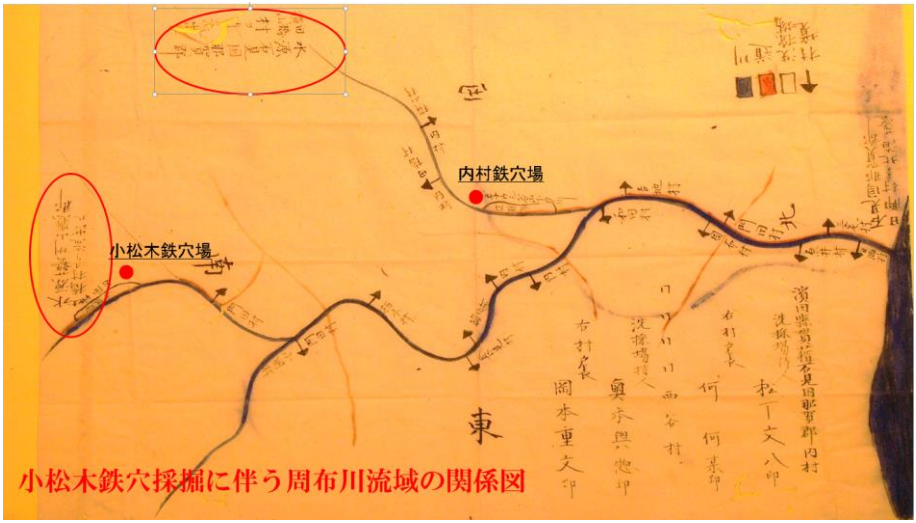
小松木鉄穴（明治８年）の場合

「小鉄ブク」で砂鉄を運ぶ

- 2,100坪（6,930㎡）７反歩。
- 90日間　5,135貫目　19ｔ256Kg。
- 830人夫　代価 530円40銭。
- 掘出し　420人　110円77銭８厘　一日６人。
- 精錬　410人　519円49銭　一日20.5人。
- 鉱区税　１円５銭。
- 単価、掘出し＝26銭４厘。精錬＝１円26銭。

馬の荷鞍

牛の荷鞍

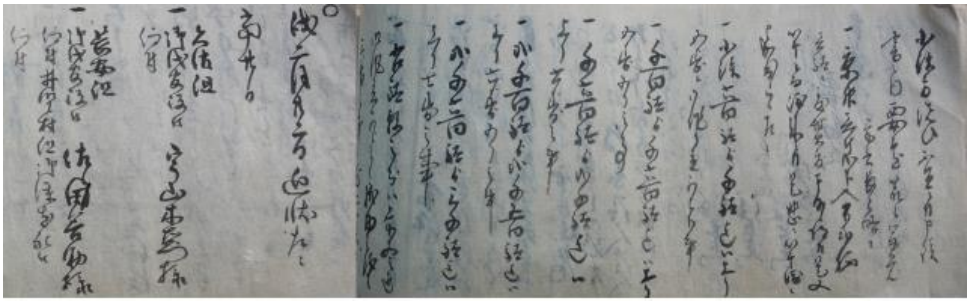


鉄穴流しで採掘する場合には、下流域の村々の承諾が必要であった。水田に影響の少ない、秋の彼岸から、春の彼岸までに作業が遂行された。砂鉄採収は、農閑期に地下農民が作業に従事した。

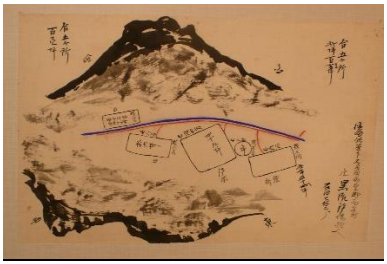
この写真は、浜田市金城町長田地区の各鉄穴場遺跡の位置である。大井谷の棚田は平安時代からの遺産である。宇佐神宮から勧請した八幡岩、大歳神社の勧請地・宮地谷、恵日山本覚寺等神社仏閣が大井谷地区に纏まっていることも黒金(たたら鉄)の生産地であったことに起因する

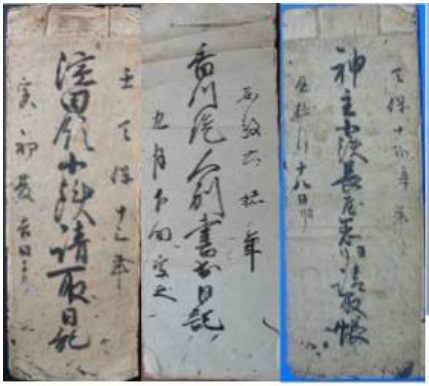
【小鉄洗い運上銀】

小鉄	６００駄～１,０００駄	上り５歩
小鉄１,１００駄～１,１００駄		５歩５厘
小鉄１,６００駄～２,０００駄		６歩
小鉄２,１００駄～２,５００駄		６歩５厘
小鉄２,６００駄～３,０００駄		７歩



砂鉄採収では、津和野藩へ絵図を添付して採掘申請を行い、小鉄洗い運上銀を上記の割合で、上納する仕組みとなっている。





小鉄請取帳

井野村大和屋の「覚」小鉄代(嘉永5年)

井野村の大和屋の砂鉄を浜田・尾崎屋が仲介して桂迫鈩へ

Ⅵ　番子の仕事

桂迫鈩には、番子 17 名との記録があり、「番子」は、内番子、外番子に分けられ、炭、役木、真砂、吹夫、小鉄洗い、土灰、野夫、釜焚の役割を循型で作業に従事していた。鈩吹き操業時には、天秤鞴を交替で初日が 6 名、二日目が 12 名、三日目が 12 名の吹夫が必要であった。

Ⅶ　金屋子信仰

鈩場の吹き小屋には、金屋子神が祀られていた。毎年３月中旬には山配、村下、炭坂、炭焚き、番子、山子など鉄山従事者は、役職に応じて御初穂料を拠出して、八幡宮へ関係者全員が参拝して、ご祈祷を受けた。

また、初籠りの日には神主を招へいして、祈祷を受け、従事者全員が参列して、御神酒をいただいた。

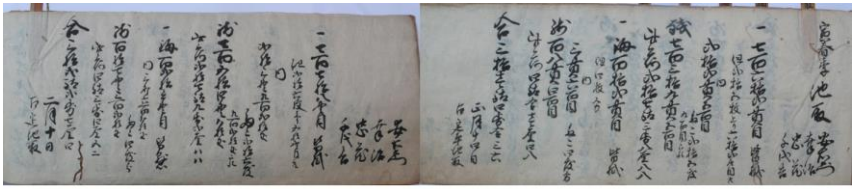
金屋子信仰・嘉永 4 年

山配	120文	× 1 =	120文
村下	120文	× 1 =	120文
炭坂	120文	× 1 =	120文
炭焚	60文	× 1 =	60文
山子	40文	×24 =	960文
番子	30文	×17 =	520文
合計			1貫900文

※　1文=5円　(9.500円)

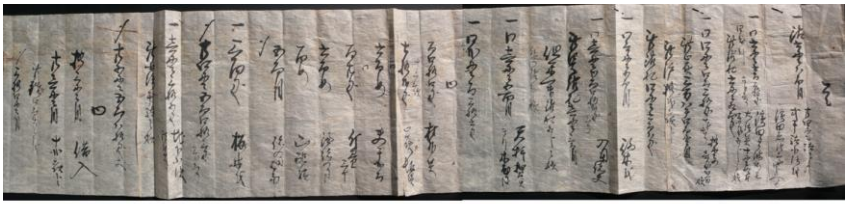
栃下鈩の金屋子社、松の木の元　　元鈩経営者宅で祀る金屋子神と折釘

Ⅷ　銑鉄の生産

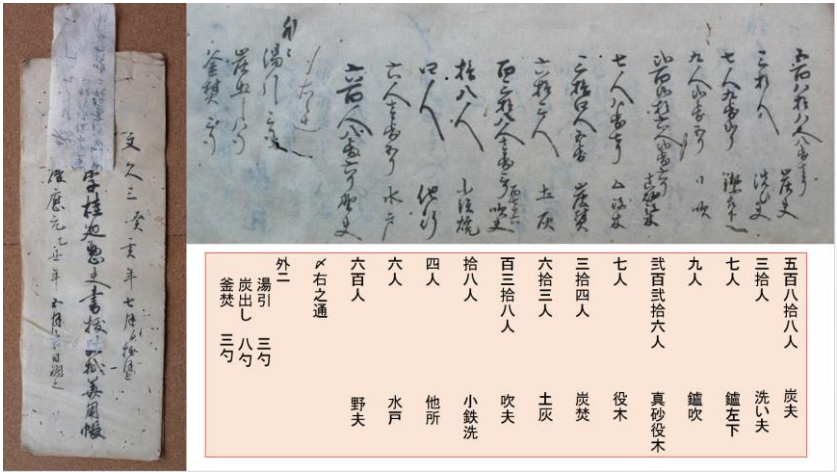


「出銑貫目帳」(慶応2年)　鑪吹による銑鉄・鋼鉄の生産記録。

寅春季				寅秋季			
1月14日	正銑 762貫目	鋼 112貫目	31駄	8月29日	正銑 722貫目	鋼 84貫目	38駄
2月10日	778	121	32	9月16日	819	93	32
3月 2 日	856	114	34	10月13日	816	144	34
3月29日	767	81	30	11月17日	737	150	31
4月18日	750	84	30	12月 4 日	804	90	32
5月16日	644	90	26	12月14日	839	86	33
6月 2 日	783	92	31	合計	(170駄)	(23駄)	(193駄)
6月24日	585	149	26				
7月 7 日	681	124	28	総計	正銑11,343貫目	鋼1,614貫目	
合計	(238駄)	(34駄)	(272駄)				

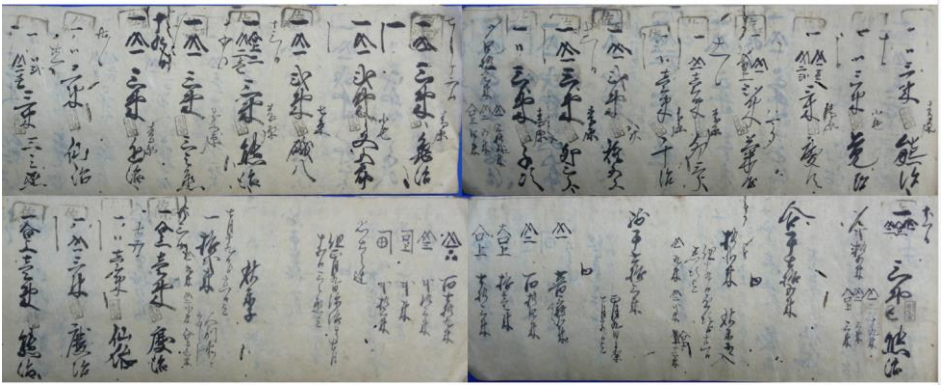


一銀六貫八百目　覚
弐千駄小鉄代　浜田志津みや買入
一同六貫六百三拾四匁　浜田より波佐迄　十貫目ニ付三匁五分
一同四貫四百三拾匁　拾貫目壱匁弐分
一同壱貫五百目　役木代
一同壱貫弐百四拾弐匁　入用　洗夫
一同壱貫五百目　天秤押代
一同弐貫百二拾六匁　内
百四拾四匁　村下
七拾弐匁　炭坂
六百匁
百廿匁　斤量三十　鑪口つき
六百匁　山配
百匁
五百目　〆
一三百目　板木代
〆廿四貫五百四拾三匁三分二厘
一壱貫三拾五匁　地下小鉄
〆廿五貫五百八拾匁　内
拾三貫目　借入
廿壱貫目　十弐夜分
〆三拾四貫目

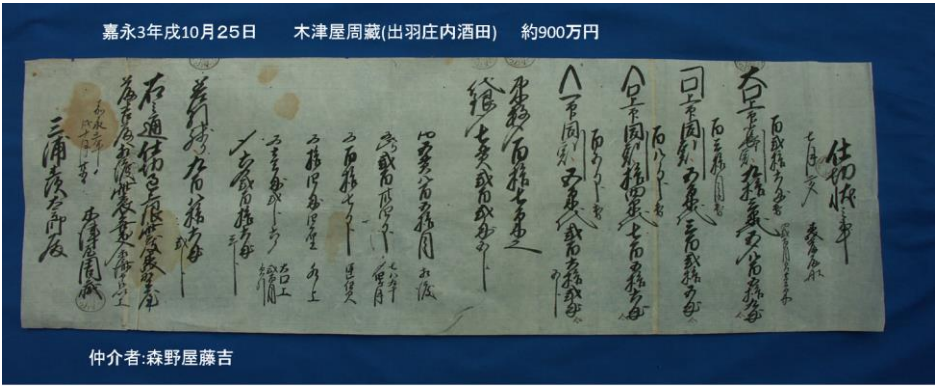


五百八拾八人　炭夫
三拾人　洗い夫
七人　鑪左下
九人　鑪吹
弐百弐拾六人　真砂役木
七人　役木
三拾四人　炭焚
六拾三人　土灰
百三拾八人　吹夫
拾八人　小鉄洗
四人　他所
六人　水戸
六百人　野夫
〆右之通
外二
湯引　三匁
炭出し　八匁
釜焚　三匁

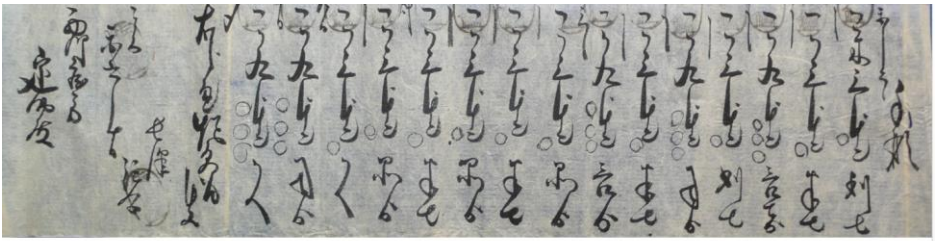
春季の銑鉄輸送 1,075 束



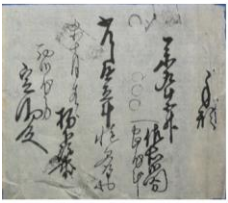
1 駄平均が 2.5 束で計算すると 430 駄となる。出荷は金城町内の馬が運搬に従事している。「買仕切証」の形式は、次の写真のとおりである。



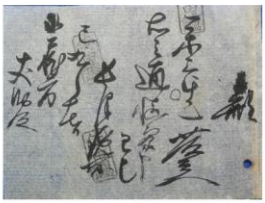
Ⅸ　賃金の支払いは米手形



長沢鈩所から西谷村蔵方へ発出された「米手形」(分配内訳)

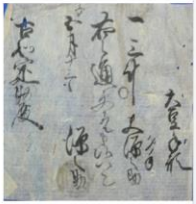


栃下鈩所の「米手形」



長沢鈩所の「米手形」

「分米手形」

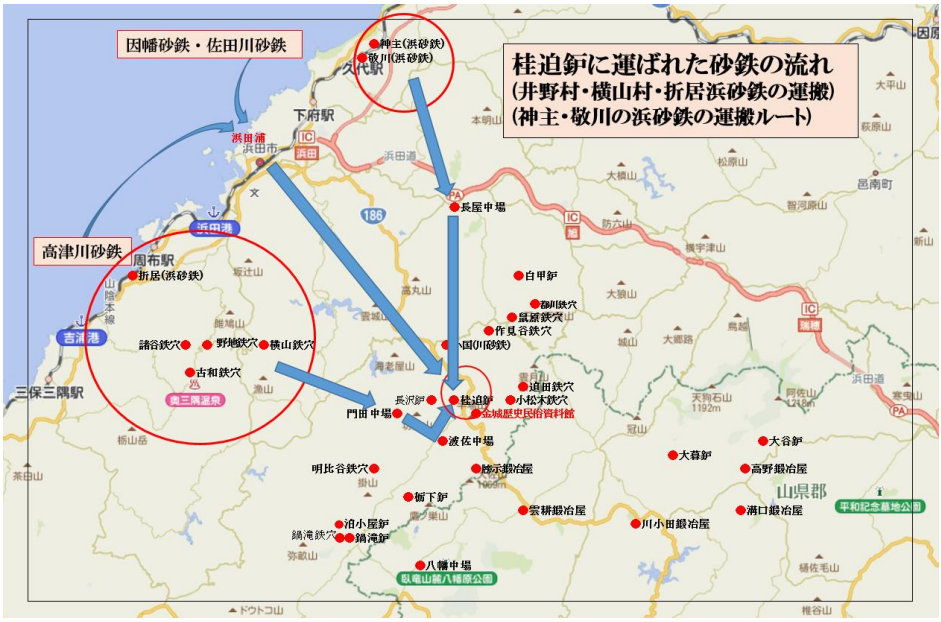


「大豆手形」

X　浜田浦から小鉄の運搬記録

天保 13 年(1842)『波佐送小鉄覚帳』沢屋彦十郎によると、浜田浦から波佐の桂迫鈩所へ砂鉄の運搬に携わった馬の持ち主は広域の馬主が参加していることが判る。

黒川(浜田市黒川町)9、長沢 2、後野 3、今迫 1、下府 1、生湯 1、牛市 1、河内 2、佐野 19。伊木(金城町)1、七条 34、小笹 15、青原 3、長屋 10、下久佐 1、下来原 32、上来原 32、波佐 3。合計 173 人の名前が記されている。一番多く運搬している人は 25 回である。平均で 32 貫目(120kg)程度の砂鉄運搬が一駄分の重量であった。



XI　井野小鉄の運搬に携わった人達

弘化 3 年(1846)『小鉄請取帳』によると、井野村小鉄が門田中場を中継して、笠松峠を経由し波佐の桂迫鈩へ砂鉄が 11,244 貫目(488 駄)運び込まれている。

平均割り 23 貫目である。10 貫目に付朱銀 1 匁 7 分運上銀が支払われた。

駄賃馬の主は井野村(浜田市三隅町)69、門田(浜田市弥栄町)65、栃木 143、稲代 24、西河内 46、日高 78、野坂 16、長安 29、小角 1、木束 1、小坂 1、波佐 43 の 516 人である。井野村大和屋市次郎の「覚」(嘉永 5 年)の割り印を見ると、「井野村今明ケ」の表示があり、野地小鉄であることが読み取れる。「井野村小鉄」とは、諸谷、室谷、野地の 3 箇所の鉄穴場の総称である。

Ⅻ　銑鉄の流通

天保 13 年(1842)『庄原三ケ所銑渡控帳』によると、庄原の香川家の経営している芸州の川小田鍛冶屋へ 8,977 貫目、高野鍛冶屋へ 618 貫目、溝口鍛冶屋へ 8,253 貫目の銑鉄、鋼鉄が三か所の鍛冶屋へ運ばれている。地元波佐の東谷村、西谷村を始め、広島の山県郡内(溝口、奥中原、荒神、土橋、大暮、川小田、大利、岡原、板村)の馬主農家が多数運搬に参加していることが判る。

安政 6 年(1859)『香川銑〆高書抜帳』の記録によると波佐の桂迫鉄所から芸州の鍛冶屋まで銑鉄の搬入に波佐の東谷村の 36 人、西谷村の 16 人が運搬に参加し、広島北広島町の上荒神 30 人、下荒神 12 人、中祖 2 人、細見 1 人、川小田 2 人、南門原 3 人、宮地 4 人、政所 10 人、奥中原 19 人の 135 人が駄賃稼ぎを行っていることが判る。

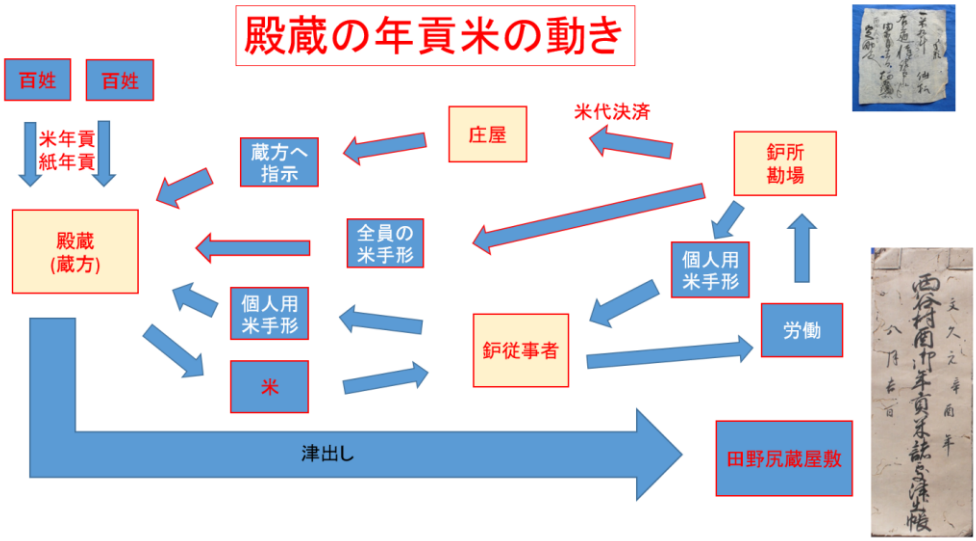
このように石見地方、芸州地方の馬の飼育農家はたたら製鉄と密接な関係があり、たたら製鉄によって農家の経済が潤っていたのである。

「長割鉄細目表」

L　藩札(米札)の流通

小鉄代、銑鉄代の決済は、「浜田藩札」、「安芸藩札」、「津和野藩札」の３種類が互いに流通しており、「浜札」、「芸札」とも呼ばれ、浜田会所で交換されていた。運搬駄賃、人夫賃などは、「切手調」や「米手形」で決済されていた。

浜田藩札(銀五匁)　津和野米札(納米四合)　(八拾文)　浜田銀札(銀五匁)　津和野米札(納米四合・弐分)　(八拾文)



浜田市金城歴史民俗資料館　浜田市金城町波佐イ 426-1

TEL 0855-44-0146　FAX 0855-44-0143

http://hazaway.com/culture/folk-museum/

2019 年 4 月 10 日発行　編集／発行者：西中国山地民具を守る会